学校の在り方地区検討委員会（東青地区）
【第１回】概要

日時：令和７年１１月２６日（水）
９：３０～１２：００
場所：アラスカ 地階 サファイア

＜出席者＞
委員
西　委　員、阿 部 委 員、八 戸 委 員、山﨑委員、工藤裕司委員、渡辺委員
佐藤泰仁委員、吉 﨑 委 員、五十嵐委員、黒丸委員、三 上 委 員、白鳥委員
横 岡 委 員、佐々木委員、成田委員（進行役）

１　開会

２　委嘱状交付

３　事務局説明
事務局が青森県立高等学校魅力づくり推進計画基本方針及び資料２について説明した。

本委員会として望ましい学校配置を取りまとめるに当たり、必ずしも１案に絞り込むのではなく、２～３案程度とするとともに、最終的には令和８年度に県教育委員会が策定する前期実施計画をもって学校配置を決定することを確認した。

４　意見交換
（１）学校の在り方について
○　青森市は、増加する外国人観光客への対応が必要な状況にある。また、第３次産業が中心であるが、海の幸、山の幸も豊富であり、それが第２次、第３次産業の基盤ともなっている。さらに、洋上風力発電の基地港湾指定により新たな産業の可能性も高まっている。このような市の特色に対応できる人財を育成する必要がある。

○　青森ブランド強化、企業ＤＸ・ＧＸ、起業・創業、洋上風力発電産業、立体観光、アート、医療、デジタル分野、国際的な情報発信、大学連携やまちづくり政策への対応ができる人財を育成するため、特色ある教育環境の整備に努めてもらいたい。

○　コミュニティ･スクールが地域において大きな役割を果たしていることから、地域とともにある高校として、小・中学校と連携した取組に期待したい。

○　青森市内の各地区では、コミュニティ・スクールを支える様々な取組がなされているが、そのような地域の教育力を活用した学校運営ができると良い。

○　広い視野で地域を捉えることで、東津軽郡のこどもにとって高校が身近で進学しやすい場所となる。高校所在地だけでなく、地域全体と関わり、体験の地域差が生じないよう工夫してもらいたい。

○　青森市が牽引役となって、地域の特性を生かした教育を推進してほしい。

○　高校全体の学力向上が必要である。学力上位校におけるエリート教育や他の高校における学力の底上げを図る教育が求められる。

○　本県の中学生は主に学力を基準に高校を選択しているが、今後、ゼネラリストのような仕事はＡＩに代わられることが予想されているので、偏差値が高い高校に進学させるという考えを見直したほうが良い。

○　将来の生活設計につながるような学びができる学科や特色が高校にあると、学力以外でこどもや保護者が高校を選択する際の基準になる。

○　特色ある学びに魅力を感じれば、時間がかかったとしても通学する生徒はいる。生徒が「行きたい」と思う各校の魅力づくりを強化することにより、ブルーカラーや手に職のある人などの育成が図られると良い。

○　浪岡中学・高校のように、生徒の「行きたい」に応え、地域とともにこどもたちを支えながら、「こどもまんなか」の教育が展開されている例を見逃さず、スポーツや文化活動に興味を持って高校を選ぶこどもも多いことを踏まえ、県外から生徒を呼び込むような特色ある高校づくりをしてほしい。

○　キャリア教育を充実させれば、スタートアップ企業が増え、地元への定着も見込まれる。具体的には、洋上風力発電関連の工業分野、中学生の志向が高いデジタル分野、病院統合を機に市中央部での需要が見込まれる看護職、東津軽郡で盛んな水産業などに注力すると良い。

○　保健師や工業の技術系公務員が不足している。自治体の技術系職を目指す人財を育成するコースを高校に作ってもらいたい。

○　制服や校則が無く、生徒の自主性に任せる高校をつくっても良いのではないか。

○　単位制は不登校経験を有するこどもたちにとって柔軟な学びの環境づくりの方策になり得ることから、拡充を検討してもらいたい。

○　学びを途切れさせないための新しい単位制を活用した学びの場も必要である。

○　高校の魅力化に向けて、各校のカリキュラムマネジメントに教育委員会が一体となって取り組むことが必要である。また、高校と地域が連携しながら、こどもをどう育てていくのかを考えることが大事である。

（２）学校配置について

①全日制課程について

○　蓬田村、外ヶ浜町、今別町の中学生にとって青森市西部の高校は通学圏内であるため、生徒の通学時間や利便性に配慮することが大事である。地域に高校がなくなると地域の活力が失われるため、地域性についても考えてもらいたい。

○　三厩地区や今別町から青森市東部の学校に通学するために、朝５時頃から活動している生徒もいるので、通学の負担を踏まえ、東部に学校配置が偏らないようにしてもらいたい。

○　学級減は避けられないとしても、様々なコースの存続や魅力ある高校づくりという点では、青森市内の高校は現状のまま配置してほしい。

○　地域の思いを考えれば学校配置は現状を基本に考えるのが良く、学校規模は適切に対応してもらえれば良い。

○　生徒数の減少に伴って学級数も減らさなければならないのは仕方ないが、各校満遍なく減らした方が良い。

○　満遍なく学級減するとなると、高校としては３～４学級はあってほしいので、前期は青森高校、東青地区統合校、青森東高校、青森北高校の普通科、青森工業高校、青森商業高校から、後期は青森高校、東青地区統合校、青森東高校、青森北高校の普通科、青森南高校のグローバル探究科、青森中央高校、青森工業高校から、それぞれ１学級ずつ減らしていくのが順当だと思われる。

○　満遍なく学級減した場合、配置教員数も減少するため、県として教員を加配できれば教育活動の充実が図られる。

○　志望倍率が高い高校は学級減を考えなくても良い。選ばれる高校を目指して、中学生や保護者が求める高校をつくっていければ良い。

○　全ての高校に多様性を持たせるのではなく、高校ごとに異なる役割を持たせるのが良い。高校選択自体が人生における選択の練習であり、自分で責任を持って高校を調べ、努力し、結果を受け入れることも大事である。

○　中学校で力を入れているキャリア教育の成果と、各校の魅力や学びの特色がマッチすれば、中学生の高校選択につながる。多様なこどもたちのニーズに対応するためにも、現状の学科は維持してもらいたい。

○　専門性のある学科は必要。学科の維持は最低限必要であり、可能であればニーズを踏まえて新たに創設することを視野に入れても良い。

○　工業高校や商業高校は専門的な学びができる高校なので残した方が良い。

○　持続可能な社会のために、専門高校は統廃合すべきではない。

○　産業教育を行う学科は、これからの社会を見据えたキャリア教育を考える上でとても重要であり、統廃合の対象にすべきでない。

○　令和１４年度までに減らす必要がある６学級の根拠を伺いたい。また、１学級当たりの人数を何人で試算しているのか伺いたい。
→（事務局）中学校卒業者数の見込み、地区間の生徒の流出入、私立高校への進学状況等を総合的に勘案し、６学級減を試算している。なお、１学級の人数は高校標準法に基づき４０人で試算している。
○　１学級の人数を４０人から変えることは可能なのか。また、１学級が４０人であることの教育的効果や科学的根拠があるのか伺いたい。
→（事務局）職業学科等で４０人未満の学級編制を行っている高校はあるが、本委員会の協議においては４０人で考えてもらいたい。なお、高校は、収容定員等を基に教職員定数が算定されることから、１学級の定員を４０人未満にすると、教職員数も減少して開設できる科目が少なくなるなどの影響が考えられる。
→（進行役）国の法律に基づき教職員定数が算定されることや、県の予算的な課題もあるため、そういった部分も含めて検討していく必要がある。

○　県で予算を確保して少人数学級編制を実施し、学級数を維持することも検討してもらいたい。
○　中学生の多様なニーズに対応するためには、財源の問題はあるが、少人数学級編制や単位制導入を検討する必要がある。

○　少人数学級編制の実施等により、高校を維持してもらいたい。

②定時制課程・通信制課程について

○　特別支援学級に在籍していた生徒や、不登校経験を有する生徒が増えている中、柔軟な学び方として学習時間の選択などができると良い。

○　広域通信制課程への入学者数が増える中、本県の定時制・通信制課程の在り方を見直す必要がある。どのようなこどもにも学びを保障する定時制・通信制課程の役割は大きいが、全国的な大資本の学校との差別化が課題である。

（３）その他の意見

○　本委員会において市町村長を委員とすることは、教育の独立性や政治的中立性を損ねる懸念がある。また、委員とするとしても、市町村長の代理出席や欠席は市町村間の公平性を欠くことになるため、全員本人出席が原則だと思われる。さらに、意見を聴取することが目的であれば市町村長は出席しなくても良いと考える。次回以降は市町村長は出席しないことを提案したいが、どのように考えるのか伺いたい。

→（事務局）県立高校は地域の方々から支援を受けていることから、地域の様々な課題を把握している市町村長の意見をいただきたいと考えている。次回以降の会議の在り方については検討する。

○　本委員会に市町村長が出席するのではなく、市町村教育長やＰＴＡの方などで協議した上で、市町村長と意見交換を行うほうが良いのではないか。

○　平内町は面積が広く駅までの移動が大変であるため、スクールバスのある私立高校を選ぶこどもがいる。通学負担への対応についても検討してもらいたい。

○　津軽線の運行がない地域からバスと鉄道を乗り継いで市内の高校に通う生徒もおり、冬は起床時刻も早く大変である。令和９年４月からはＮＰＯ法人が蟹田駅までバスを運行する予定なので、こどもたちのためのダイヤを考えていきたい。一方で、各校の始業時刻をもう少し遅くできないものかと思っている。

○　高校には部活動等の魅力もあるが、下校時刻に公共交通機関がなく、部活動に取り組めない生徒もいるため、交通手段等の仕組みを作る必要がある。また、自宅からの通学が難しい場合、下宿などに係る経済的負担への支援を検討する必要もある。

５　閉会